一般論文

短期大学学生の運動経験および運動意識の推移

―30年間（1982年～2012年）の調査結果の分析―

Transition of Experience and Consciousness in Physical Activities of Junior College Students

― Analysis of Investigation Data for 30 Years ―

澤　田　孝　二，澤　田　由　美

Koji SAWADA，Yumi SAWADA

キーワード：短期大学学生，運動経験，運動意識，推移

概　要

1982年，1992年，2002年，2012年に短期大学に入学してきた学生を対象として実施した，中学・高校時代の運動部活動の経験，大学入学後の運動への関心や運動実践，健康への関心や健康状態などについての調査結果の分析を通して，次のようなことが明らかになった。

1）中学・高校とも運動部活動経験のある者の比率は，この30年間に増加する傾向がみられた。

2）中学・高校時代に運動部活動の経験ある者の取り組んだ種目は，中学，高校のいずれも球技系種目の経験者が多かったが，調査年によって上位種目の順位に変動があり，また中学と高校でも上位種目に違いがみられた。

3）中学・高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績をみると，中学・高校とも「特になし」という回答が最も多く，中学では「県大会出場」と「県内地区大会出場」が比較的多く，高校では「県大会出場」が比較的多かった。

4）4つの調査年で学生が最も関心を持っている運動種目は，1982年が「テニス」，1992年が「野球」，2002年が「バレーボール」，2012年が「サッカー」であり，この30年間に関心の高い運動種目が大きく変化していることが分かった。

5）4つの調査年で学生が最も取り組んでみたいと思っている運動種目の第1位は，1982年が「バトミントン」，1992年が「テニス」，2002年と2012年が共に「バレーボール」であり，2位以下の運動種目もこの30年の間にかなり変化していることが分かった。

6）体を動かす機会が「大変多い」「どちらかというと多い」と回答した学生は，1982年には半数近くを占めたが，2002年には4分の1にまで低下した。しかし2012年には1982年のレベルに回復した。

7）運動に対して「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」と回答した学生の比率は，いずれの調査年も6割台であった。

8）運動のための環境に「大変恵まれている」「どちらかというと恵まれている」と回答した学生は，1982年に2割であったものが2012年には4割と，年々上昇していた。

9）運動に対する心身の適性では，「適性が高い」「どちらかというと適性が高い」と回答した学生は，1982年に3割台であったものが，2012年には5割を超え，この30年の間に適性の高い

学生が増える傾向がみられた。

10）日頃の健康状態が「大変良好」「どちらかというと良い」と回答した学生は，1982年～2002年にかけて減少傾向にあったが，2012年には７割を超え，健康状態が良い傾向にある学生の比率が2012年で最も高くなった。

11）健康に対して「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」と回答した学生は，この30年間にわずかずつではあるが増える傾向がみられた。

１．はじめに

筆者らは1982年以来，短期大学生を対象として日常生活習慣と心身の健康に関する調査を実施し，その分析結果を報告[1)～7)]してきているが，これと併せて同じ対象に対して中学・高校時代の運動部経験や運動種目などについての調査も行なってきた。そして2001年には学生の運動習慣と健康生活との関係に着目し，日頃積極的に運動している学生とそうでない学生で，健康状態や生活行動習慣等に違いがみられることを報告[8)]した。2004年には過去20年間に実施してきた学生の中学・高校時代の運動部活動についての調査結果を分析し，20年間に学生の運動経験や運動意識などがどのように推移してきたかを報告[9)]した。2012年には学生の運動実践に影響する要因について分析し，運動への関心，運動歴，運動環境などが学生の運動実践に影響を及ぼしていることなどを報告[10)]した。2013年には中学・高校時代に運動部活動を行っていた者とそうでない者の大学入学後の健康生活の状態を比較し，中学・高校時代の運動実践がその後の健康生活にどのように影響を及ぼしているかを報告[11)]した。さらに2014年には学生の性格特性，スポーツへの取り組み，心身の健康，生活行動・習慣の関連を分析し，学生の性格特性がスポーツ行動や心身の健康にどのように影響を及ぼしているかを報告[12)]した。

学生の健康生活や運動経験等に関する調査を開始してから30年以上になり，学生の運動経験や健康や運動に対する意識も変容してきていることが考えられることから，今回，1982年～2012年の30年間の調査結果のうち10年ごと（1982年，1992年，2002年，2012年）のデータを分析し，学生の運動経験や運動意識が30年間にどのように推移してきたかについて報告することにした。　大学生の運動経験や運動習慣に関する学校保健分野での研究報告には，園部らによる大学生の運動・スポーツ経験と健康度に関するもの[13)]，大畑らによる女子短大生の運動習慣と骨強度に関するもの[14)]，金らによる大学生の運動・スポーツの継続要因に関するもの[15)]，宮脇らによる大学生の運動習慣背景要因に関するもの[16)17)]，伊波らによる大学生の運動行動変容ステージに関するもの[18)]，棟方らによる女子大学生の体力と身体活動の関連に関するもの[19)]，小野による健康生活と運動に関するもの[20)]，辻による大学生の生活時間構造とスポーツ活動についてのもの[21)]，水間らによる女子運動部員の体格・体力・運動能力に関するもの[22)]などがあるが，いずれも比較的短い期間の調査に基づいた報告にとどまっており，30年間にわたる大学生の運動経験や運動意識の推移について調査したものは見当たらず，今回の調査結果の報告は，学生の運動への取り組み方を考えていく上で，重要な意味をもつものと思われた。

２．方　法

調査対象は，1982年，1992年，2002年，2012年にＹ短期大学保育科に入学した学生であり，調査はいずれの年度も１年次の11～12月に筆者の担当している保健体育科目の講義時間を使って実施した。回答者数は，1982年132名，1992年142名，2002年115名，2012年161名，合計550名である。調査項目は，中学・高校時代の運動部活動の経験の有無，取り組んだ運動種目名，大会への出場経験の有無，関心を持っている運動種目，実際にとりくんでみたい運動種目，大学入学後の運動習慣，運動への関心，運動のための環境，運動に対する心身の適性，日頃の健康状態，健康への関心など10項目であり，調査結果を分析し1982年，1992年，2002年，2012年で結果に違いがみられるかを比較した。

中学・高校時代の運動部活動経験者の比率，中

学・高校で同一の運動種目を継続した者の比率，中学・高校時代に運動種目での大会出場経験をもつ者の比率については，４つの調査年で違いがみられるかどうかを X^2検定[23)24)] を用いて統計的に分析した。また，大学入学後の運動習慣，運動への関心，運動のための環境，運動に対する心身の適性，日頃の健康状態，健康への関心については，４つの調査年で違いがみられるかどうかをテューキーの方法（平均値の多重比較）[25)] ならびに X^2検定を用いて統計的に分析した。

３．結果および考察

１）各調査年の運動部活動経験者の割合

1982年，1992年，2002年，2012年の調査結果から学生の中学・高校時代の運動部活動の経験者の割合をみると，「中学・高校とも経験あり」の比率は，1982年が39％，1992年が45%，2002年が54%，2012年が52% であり，1982年，1992年，2002年と年々その比率が高くなっていたが，2012年では2002年とほぼ同率であった。「中学のみ経験あり」は1982年が37%，1992年が28%，2002年が29%，2012年が23% であり，年々その比率が低下していった。「高校のみ経験あり」は1982年が８％，1992年が６％，2002年が４％，2012年が５％であり，いずれの調査年も低い比率であった。「中学・高校とも経験なし」は，1982年が16%，1992年が21%，2002年が13%，2012年が21% であり，1992年と2012年が高く，2002年が最も低かっ

表１．各調査年の学生の中学・高校での運動部活動経験の有無

運動部活動経験	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
中学・高校ともあり	52	39.4	64	45.1	62	53.9	83	51.6	261	47.5
中学のみあり	49	37.1	39	27.5	33	28.7	37	23	158	28.7
高校のみあり	10	7.6	9	6.3	5	4.3	8	5	32	5.8
中学・高校ともなし	21	15.9	30	21.1	15	13	33	20.5	99	18
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

表２．中学・高校とも運動部経験のある学生の割合の年度間の有意差

調査年	X^2値	有意差
1982年－1992年	0.739	なし
1982年－2002年	4.552	P＜0.05
1982年－2012年	3.408	なし
1992年－2002年	1.62	なし
1992年－2012年	0.981	なし
2002年－2012年	0.08	なし

表３．中学・高校とも運動部経験のない学生の割合の年度間の有意差

調査年	X^2値	有意差
1982年－1992年	0.829	なし
1982年－2002年	0.363	なし
1982年－2012年	0.829	なし
1992年－2002年	2.268	なし
1992年－2012年	0	なし
2002年－2012年	2.268	なし

た。

４つの調査年で運動部活動経験者の割合に違いがみられるかどうか，X^2検定を用いて調べた。中学・高校とも運動部活動を経験した学生とそれ以外の学生に分けてクロス表を用いて分析した結果，1982年－2002年で統計的な有意差が認められた。また，中学・高校とも運動部活動の経験のない学生とそれ以外の学生に分けてクロス表を用いて分析した結果では，いずれの調査年の間でも統計的な有意差は認められなかった。

このように，2002年および2012年の学生では，中学・高校とも運動部活動を経験した者の比率が５割を超えていたが，スポーツ基本法の制定[26]や，近年の学校運動部活動の奨励，サッカーや野球など球技系種目を中心としたわが国のスポーツ熱の高まり[27)28)]などが，中学・高校での運動部活動経験者の増加に影響していることが考えられた。（表１～３を参照）

２）運動部活動の経験者が中学・高校時代に取り組んだ運動種目名

学生が中学時代に取り組んだ運動種目をみると，1982年では「バレーボール」が23％と最も比率が高く，「テニス」17％，「バスケット」14％と続いた。1992年では「テニス」が18％で最も比率が高く，「バレーボール」16％，「バスケット」13％と続いた。2002年では「テニス」と「バスケット」が共に17％，「バレーボール」が16％と上位３種目がほぼ同じ比率で並んだ。2012年では「テニス」が21％と最も高く，「バレーボール」15％，「バスケット」12％と続いた。このようにいずれの調査年においても「バレーボール」「テニス」「バスケット」の３つの球技系種目が上位３つを占めていた。球技以外では「陸上競技」がいずれの調査年も10％前後と４番目に多かった。また上位10種目の中に「ソフトボール」「卓球」「剣道」「バトミントン」「水泳」「器械体操」が含まれ，球技系種目の経験者がひじょうに多いことがわかった。

学生が高校時代に取り組んだ運動種目をみると，1982年では「バレーボール」が10％と最も比率が高く，「テニス」８％，「バトミントン」「ソフトボール」各６％，「バスケット」５％と続いた。1992年では「テニス」が８％と最も比率が高く，「陸上競技」と「バレーボール」が共に６％，「バスケット」５％と続いた。2002年では「バトミントン」が14％と最も比率が高く，「バレーボール」８％，「バスケット」７％，「テニス」「弓道」が共に４％と続いた。2012年では「テニス」が９％と最も比率が高く，「バトミントン」７％，「バレーボール」「バスケット」「陸上競技」が共に６％と続いた。このように，調査年によって上位にあった種目の順位に違いがみられたが，中学時代と同様に球技系種目が上位を占めており，球技以外では「陸上競技」「弓道」「水泳」「剣道」などが上位に含まれていた。

中学と高校で上位種目に違いがみられるかを比較すると，高校で「バトミントン」「弓道」「ハンドボール」「剣道」の経験者が増え，逆に中学で比較的多かった「卓球」や「器械体操」は，高校では著しく減少していた。

中学・高校での同一種目継続者は，1982年では26名で中学・高校とも運動部活動を経験した者の50％を占めた。1992年では27名で中学・高校とも運動部活動を経験した者の42％を占めた。2002年では35名で中学・高校とも運動部活動を経験した者の56％を占めた。2012年では58名で中学・高校とも運動部活動を経験した者の70％を占めた。同一種目継続者を種目別にみると，「テニス」「バレーボール」「バスケットボール」「陸上競技」「バトミントン」などの種目で多く，上位５種目のうち「陸上競技」以外はすべて球技系種目であった。逆に「卓球」や「水泳」では中学・高校と継続して取り組む者が大幅に減る傾向がみられた。また年度別にみると，中学・高校での同一種目継続者の比率は1992年には４割強であったが，2002年には６割弱，さらに2012年には７割と，近年上昇する傾向がみられた。

このように，中学，高校のいずれも球技系種目の経験者が多いことがわかったが，調査年によって上位種目の順位に変動があり，また中学と高校でも上位種目に違いがみられた。すなわち，中学・高校とも上位に入っている種目，中学では上位に入っていたが高校になると順位が下がる種目，中学ではそれほど多くないが高校で上位に入っている種目などがみられた。また，「テニス」「バレーボール」「バスケットボール」「陸上競技」などの

表４．各調査年の学生が中学時代に取り組んだ運動種目

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
テニス	23	17.4	25	17.6	19	16.5	33	20.5	100	18.2
バレーボール	31	23.5	23	16.2	18	15.7	24	14.9	96	17.5
バスケット	18	13.6	19	13.4	19	16.5	19	11.8	75	13.6
陸上競技	13	9.8	13	9.2	11	9.6	12	7.5	49	8.9
ソフトボール	10	7.6	9	6.3	7	6.1	8	5	34	6.2
卓球	11	8.3	6	4.2	8	7	2	1.2	27	4.9
剣道	3	2.3	5	3.5	6	5.2	5	3.1	19	3.5
バトミントン	4	3	4	2.8	8	7	4	2.5	16	2.9
水泳	5	3.8	2	1.4	2	1.7	1	0.6	10	1.8
器械体操	4	3	2	1.4	0	0	0	0	6	1.1
ハンドボール	2	1.5	0	0	1	0.9	2	1.2	5	0.9
サッカー	0	0	0	0	1	0.9	3	1.9	4	0.7
野球	0	0	0	0	1	0.9	3	1.9	4	0.7
キックボール	3	2.3	0	0	0	0	0	0	3	0.5
弓道	0	0	1	0.7	0	0	2	1.2	3	0.5
空手	0	0	1	0.7	1	0.9	0	0	2	0.4
新体操	0	0	1	0.7	0	0	1	0.6	2	0.4
バレエ	0	0	1	0.7	1	0.9	0	0	2	0.4
スキー	0	0	0	0	1	0.9	0	0	1	0.2
スケート	0	0	0	0	1	0.9	0	0	1	0.2
ダンス	1	0.8	0	0	0	0	0	0	1	0.2
なぎなた	0	0	0	0	1	0.9	0	0	1	0.2
バトン	1	0.8	0	0	0	0	0	0	1	0.2
ホッケー	0	0	0	0	0	0	1	0.6	1	0.2
特になし	31	23.5	39	27.5	20	17.4	41	25.5	131	23.8
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

ように中学・高校と継続する者の多い種目，「卓球」「水泳」などのように継続する者が少ない種目などがみられた。（表４～５を参照）

３）中学・高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績

各調査年の学生が中学時代に取り組んだ運動種目の競技成績をみると，1982年では「特になし」が85%と最も多く，「県大会出場」が８%，「県内地区大会出場」が６%，「地方大会出場」が１%と続いた。1992年では「特になし」が73%と最も多く，「県内地区大会出場」が18%，「県大会出場」が７%，「地方大会出場」が２%と続いた。2002年では「特になし」が49%と最も多く，「県大会出場」が24%，「県内地区大会出場」が15%，「地方大会出場」が８%，「全国大会出場」が４%と続いた。2012年では「特になし」が57%と最も多く，「県大会出場」が21%，「県内地区大会出場」が13%，「地方大会出場」が６%，「全国大会出場」が４%と続いた。

中学時代に取り組んだ運動種目で大会出場経験のある者の割合に４つの調査年で違いがみられるかどうか，X^2 検定を用いて調べた。その結果，1982年－1992年，1982年－2002年，1982年－2012年，1992年－2002年，1992年－2012年の間で統計的な有意差が認められた。

各調査年の学生が高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績をみると，1982年では「特になし」が88%と最も多く，「県大会出場」が５%，「地方大会出場」が３%，「全国大会出場」と「県内地区大会出場」が共に２%と続いた。1992年では「特になし」が77%と最も多く，「県大会出場」が15%，「県内地区大会出場」が５%，「全国大会出場」が２%，「地方大会出場」が１%と続いた。2002年では「特になし」が68%と最も多く，「県大会

表５．各調査年の学生が高校時代に取り組んだ運動種目

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
バトミントン	8	6.1	6	4.2	16	13.9	11	6.8	41	7.5
テニス	10	7.6	11	7.7	5	4.3	15	9.3	41	7.5
バレーボール	13	9.8	8	5.6	9	7.8	10	6.2	40	7.3
バスケット	7	5.3	7	4.9	8	7	10	6.2	32	5.8
陸上競技	4	3	9	6.3	1	0.9	10	6.2	24	4.4
弓道	4	3	6	4.2	4	3.5	4	2.5	18	3.3
ソフトボール	8	6.1	5	3.5	0	0	4	2.5	17	3.1
ハンドボール	3	2.3	2	1.4	2	1.7	3	1.9	10	1.8
水泳	0	0	4	2.8	3	2.6	2	1.2	9	1.6
剣道	1	0.8	3	2.1	2	1.7	2	1.2	8	1.5
卓球	0	0	3	2.1	3	2.6	1	0.6	7	1.3
サッカー	0	0	1	0.7	2	1.7	4	2.5	7	1.3
空手	0	0	4	2.8	1	0.9	1	0.6	6	1.1
チアリーダー	0	0	0	0	3	2.6	3	1.9	6	1.1
ダンス	2	1.5	0	0	0	0	3	1.9	5	0.9
野球	0	0	0	0	1	0.9	4	2.5	5	0.9
山岳	1	0.8	2	1.4	0	0	1	0.6	4	0.7
スキー	1	0.8	0	0	2	1.7	1	0.6	4	0.7
バレエ	0	0	1	0.7	1	0.9	0	0	2	0.4
新体操	0	0	1	0.7	0	0	1	0.6	2	0.4
ホッケー	0	0	0	0	0	0	2	1.2	2	0.4
応援	1	0.8	0	0	0	0	0	0	1	0.2
ラグビー	0	0	1	0.7	0	0	0	0	1	0.2
エアロビクス	0	0	1	0.7	0	0	0	0	1	0.2
カヌー	0	0	1	0.7	0	0	0	0	1	0.2
スケート	0	0	0	0	1	0.9	0	0	1	0.2
ウエイトリフティング	0	0	0	0	1	0.9	0	0	1	0.2
特になし	70	53	69	48.6	50	43.5	69	42.9	258	46.9
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

出場」が12%,「地方大会出場」と「全国大会出場」が共に７%,「県内地区大会出場」が６%と続いた。2012年では「特になし」が72% と最も多く,「県大会出場」が16%,「地方大会出場」が５%,「全国大会出場」 が４%,「県内地区大会出場」 が３%と続いた。

高校時代に取り組んだ運動種目で大会出場経験のある者の割合に４つの調査年で違いがみられるかどうか，X^2検定を用いて調べた。その結果，1982年－1992年，1982年－2002年，1982年－2012年の間で統計的な有意差が認められた。

このように，中学・高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績をみると，中学・高校とも「特になし」という回答が最も多く，調査年により多少の違いはみられるが，中学では「県大会出場」と「県内地区大会出場」が比較的多く，「地方大会出場」と「全国大会出場」はわずかであった。高校では「県大会出場」が比較的多く，「県内地区大会出場」「地方大会出場」「全国大会出場」はわずかであった。また，1982年では「特になし」が中学・高校とも８割を超えていたが，1992年では中学・高校とも７割台，2002年～2012年では中学で５～６割，高校で７割前後と1982～1992年に比べると減少し，大会出場経験をもつ者の比率が高まる傾向にあった。（表６～10を参照）

３）学生が関心を持っている運動種目

各調査年の学生が関心を持っている運動種目は，1982年では「テニス」 が46% で最も比率が高く，以下「バトミントン」22%,「バレーボール」18%,「野球」12% と続き， 種目数は24種目に及

表６．各調査年の中学・高校での同一種目継続者の人数（種目別）

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
バレーボール	10	38.5	5	18.5	7	20	9	15.5	31	21.2
テニス	6	23.1	7	25.9	4	11.4	15	25.9	32	21.9
バスケット	3	11.5	5	18.5	8	22.9	8	13.8	24	16.4
陸上競技	3	11.5	3	11.1	3	8.6	8	13.8	17	11.6
バトミントン	1	3.8	1	3.7	4	11.4	2	3.4	8	5.5
ソフトボール	2	7.7	1	3.7	0	0	4	6.9	7	4.8
剣道	0	0	1	3.7	2	5.7	2	3.4	5	3.4
サッカー	0	0	0	0	1	2.9	3	5.2	4	2.7
卓球	0	0	1	3.7	2	5.7	0	0	3	2.1
バレエ	0	0	1	3.7	1	2.9	0	0	2	1.4
ハンドボール	1	3.8	0	0	0	0	1	1.7	2	1.4
新体操	0	0	1	3.7	0	0	1	1.7	2	1.4
水泳	0	0	0	0	1	2.9	1	1.7	2	1.4
野球	0	0	0	0	0	0	2	3.4	2	1.4
空手	0	0	1	3.7	0	0	0	0	1	0.7
スキー	0	0	0	0	1	2.9	0	0	1	0.7
スケート	0	0	0	0	1	2.9	0	0	1	0.7
弓道	0	0	0	0	0	0	1	1.7	1	0.7
ホッケー	0	0	0	0	0	0	1	1.7	1	0.7
合計	26	100	27	100	35	100	58	100	146	100

表７．各調査年の学生が中学時代に取り組んだ運動種目の競技成績（最高成績）

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
県内地区大会出場	8	6.1	25	17.6	17	14.7	21	13	71	12.9
県大会出場	11	8.3	10	7	28	24.3	33	20.5	82	14.9
地方大会出場	1	0.8	3	2.1	9	7.8	9	5.6	22	4
全国大会出場	0	0	0	0	5	4.3	7	4.3	12	2.2
特になし	112	84.8	104	73.2	56	48.7	91	56.5	363	66
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

表８．各調査年の学生が高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績（最高成績）

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
県内地区大会出場	2	1.5	7	4.9	7	6.1	5	3.1	21	3.8
県大会出場	7	5.3	21	14.8	14	12.2	25	15.5	67	12.2
地方大会出場	4	3	2	1.4	8	7	8	5	22	4
全国大会出場	3	2.3	3	2.1	8	7	7	4.3	21	3.8
特になし	116	87.9	109	76.8	78	67.8	116	72	419	76.2
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

表９．中学運動部で大会出場経験のある学生の割合の年度間の有意差

	X^2値	有意差
1982年－1992年	4.34	P＜0.05
1982年－2002年	29.308	P＜0.01
1982年－2012年	19.038	P＜0.01
1992年－2002年	12.106	P＜0.01
1992年－2012年	5.626	P＜0.02
2002年－2012年	1.285	なし

表10．高校運動部で大会出場経験のある学生の割合の年度間の有意差

調査年	X^2値	有意差
1982年－1992年	4.19	P＜0.05
1982年－2002年	11.655	P＜0.01
1982年－2012年	8	P＜0.01
1992年－2002年	2.031	なし
1992年－2012年	0.658	なし
2002年－2012年	0.381	なし

んだ。1992年では「野球」が24%で最も比率が高く，以下「サッカー」と「スキー」が共に18%,「バレーボール」17%と続き，種目数は22種目に及んだ。2002年では「バレーボール」が46%で最も比率が高く，以下「サッカー」20%,「バスケット」17%,「バトミントン」15%と続き，種目数は29種目に及んだ。2012年では「サッカー」が30%で最も比率が高く，以下「バレーボール」27%,「野球」と「バスケット」が共に17%で続き，種目数は34種目に及んだ。

このように，４つの調査年で学生が最も関心を持っている運動種目は，1982年が「テニス」，1992年が「野球」，2002年が「バレーボール」，2012年が「サッカー」であり，この30年間に関心の高い運動種目が大きく変化していることが分かった。（表11を参照）

４）学生が実際に取り組んでみたいと思っている運動種目

各調査年の学生が実際に取り組んでみたいと思っている運動種目は，1982年では「バトミントン」が45%で最も比率が高く，以下「テニス」38%,「バレーボール」27%,「バスケット」17%と続き，種目数は18種目に及んだ。1992年では「テニス」が30%で最も比率が高く，以下「スキー」24%,「バレーボール」19%,「バスケット」16%と続き，種目数は23種目に及んだ。2002年では「バレーボール」が28%で最も比率が高く，以下「バトミントン」18%,「スノーボード」17%,「テニス」13%と続き，種目数は29種目に及んだ。2012年では「バレーボール」が15%で最も比率が高く，以下「バトミントン」と「サッカー」が共に14%,「バスケット」13%と続き，種目数は30種目に及んだ。

このように，４つの調査年で学生が最も取り組んでみたいと思っている運動種目の第１位は，1982年が「バトミントン」，1992年が「テニス」，2002年と2012年が共に「バレーボール」であり，２位以下の運動種目もこの30年の間にかなり変化していることが分かった。また，学生が関心を持っている運動種目と，実際に取り組んでみたい運動種目はかなり異なっており，関心を持っている運動種目の中には，試合の観戦や応援が主になっているものがかなり含まれていると考えられた。（表12を参照）

５）大学入学後の運動ならびに健康に関わる各調査項目の分析結果

大学入学後の体を動かす機会，運動への関心，運動のための環境，運動に対する心身の適性，日

表11．各調査年の学生が関心を持っている運動種目

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
バレーボール	24	18.2	24	16.9	53	46.1	44	27.3	145	26.4
テニス	60	45.5	21	14.8	14	12.2	16	9.9	111	20.2
サッカー	4	3	26	18.3	23	20	48	29.8	101	18.4
野球	16	12.1	34	23.9	16	13.9	28	17.4	94	17.1
バスケット	8	6.1	18	12.7	20	17.4	27	16.8	73	13.3
バトミントン	29	22	4	2.8	17	14.8	19	11.8	69	12.5
スキー	13	9.8	25	17.6	2	1.7	3	1.9	43	7.8
スケート	9	6.8	10	7	3	2.6	6	3.7	28	5.1
水泳	2	1.5	6	4.2	6	5.2	10	6.2	24	4.4
ダンス	10	7.6	2	1.4	2	1.7	8	5	22	4
スキューバダイビング	2	1.5	11	7.7	1	0.9	0	0	14	2.5
陸上競技	3	2.3	3	2.1	2	1.7	5	3.1	13	2.4
卓球	6	4.5	0	0	5	4.3	2	1.2	13	2.4
ゴルフ	2	1.5	7	4.9	3	2.6	0	0	12	2.2
ソフトボール	4	3	1	0.7	1	0.9	4	2.5	10	1.8
ラグビー	0	0	8	5.6	1	0.9	0	0	9	1.6
弓道	3	2.3	0	0	2	1.7	2	1.2	7	1.3
フットサル	0	0	0	0	2	1.7	4	2.5	6	1.1
スノーボード	0	0	0	0	4	3.5	2	1.2	6	1.1
ハンドボール	1	0.8	0	0	0	0	4	2.5	5	0.9
アメフト	0	0	3	2.1	1	0.9	1	0.6	5	0.9
ホッケー	1	0.8	1	0.7	0	0	2	1.2	4	0.7
新体操	0	0	3	2.1	0	0	1	0.6	4	0.7
剣道	2	1.5	0	0	0	0	2	1.2	4	0.7
ボウリング	3	2.3	1	0.7	0	0	0	0	4	0.7
アイスホッケー	0	0	3	2.1	0	0	0	0	3	0.5
ローラースケート	3	2.3	0	0	0	0	0	0	3	0.5
その他の種目	3	2.3	2	1.4	10	8.7	13	8.1	28	5.1
特になし	4	3	5	3.5	7	6.1	9	5.6	25	4.5
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

頃の健康状態，健康への関心，以上６つの事項について，1982年，1992年，2002年，2012年の調査結果を比較した。

体を動かす機会では，「大変多い」「どちらかというと多い」を合わせた比率は，1982年に47%であったものが，1992年には36%に，2002年には26%にまで低下した。しかし2012年には48%と1982年のレベルに回復した。「多いとも少ないとも言えない」は1982年が26%，1992年が44%，2002年が34%，2012年が37%であり，1992年で最も高率であった。「どちらかというと少ない」「きわめて少ない」を合わせた比率は，1982年に27%，1992年に20%であったものが，2002年には40%にまで上昇し，運動不足傾向の学生が増えたが，2012年には24%と再び低下した。４つの調査年で「どちらかというと少ない」または「きわめて少ない」と答えた学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかを X^2 検定を用いて調べた結果，1992年－2002年，2002年－2012年でその割合に統計的な有意差があることがわかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，大変多い：５，どちらかというと多い：４，多いとも少ないとも言えない：３，どちらかというと少ない：２，きわめて少ない：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が3.29±1.08，1992年が3.25±1.01，2002年が2.88±0.96，2012年が3.30±1.04であり，2002年の平

表12. 各調査年の学生が実際に取り組んでみたいと考えている運動種目

種目名	1982年		1992年		2002年		2012年		全　体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
バレーボール	36	27.3	27	19	32	27.8	24	14.9	119	21.6
テニス	50	37.9	42	29.6	15	13	12	7.5	119	21.6
バトミントン	59	44.7	14	9.9	21	18.3	22	13.7	116	21.1
バスケット	22	16.7	23	16.2	5	4.3	21	13	71	12.9
スキー	3	2.3	34	23.9	9	7.8	4	2.5	50	9.1
サッカー	1	0.8	5	3.5	6	5.2	22	13.7	34	6.2
スノーボード	0	0	0	0	20	17.4	12	7.5	32	5.8
ソフトボール	10	7.6	4	2.8	4	3.5	9	5.6	27	4.9
卓球	17	12.9	5	3.5	3	2.6	2	1.2	27	4.9
ダンス	3	2.3	7	4.9	4	3.5	10	6.2	24	4.4
水泳	1	0.8	12	8.5	4	3.5	6	3.7	23	4.2
野球	0	0	5	3.5	3	2.6	11	6.8	19	3.5
スケート	1	0.8	3	2.1	2	1.7	7	4.3	13	2.4
ゴルフ	1	0.8	7	4.9	3	2.6	1	0.6	12	2.2
フットサル	0	0	0	0	4	3.5	8	5	12	2.2
スキューバダイビング	0	0	6	4.2	4	3.5	0	0	10	1.8
ハンドボール	2	1.5	0	0	2	1.7	2	1.2	6	1.1
器械体操	3	2.3	2	1.4	0	0	0	0	5	0.9
陸上競技	1	0.8	0	0	0	0	3	1.9	4	0.7
剣道	2	1.5	0	0	0	0	2	1.2	4	0.7
空手	0	0	1	0.7	1	0.9	1	0.6	3	0.5
アーチェリー	2	1.5	0	0	0	0	1	0.6	3	0.5
ウインドサーフィン	0	0	1	0.7	0	0	2	1.2	3	0.5
スカイダイビング	0	0	2	1.4	1	0.9	0	0	3	0.5
その他の種目	1	0.8	5	3.5	11	9.6	11	6.8	28	5.1
特になし	4	3	4	2.8	14	12.2	33	20.5	55	10
回答者数	132	100	142	100	115	100	161	100	550	100

均が他の調査年に比べて低い値であったが，有意差検定の結果，４つの調査年の平均値の間に統計的な有意差は認められなかった。

運動に対する関心では，「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」を合わせた比率は1982年が60％，1992年が64％，2002年が60％，2012年が62%，「関心があるともないとも言えない」は1982年が32％，1992年が29％，2002年が27％，2012が22%，「どちらかというと関心が少ない」「関心がない」を合わせた比率は1982年が９％，1992年が７％，2002年が12％，2012年が16%であり，近年「どちらかというと関心が少ない」「関心がない」を合わせた比率がやや高くなっていた。４つの調査年で「どちらかというと関心が少ない」または「関心がない」と答えた学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかをX^2検定を用いて調べた結果，1982年－2002年，1982年－2012年，1992年－2002年，1992年－2012年でその割合に統計的な有意差があることがわかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，大変関心がある：５，どちらかというと関心がある：４，関心があるともないとも言えない：３，どちらかというと関心が少ない：２，関心がない：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が3.72±1.02，1992年が3.85±0.98，2002年が3.72±0.93，2012年が3.76±1.13であり，有意差検定の結果，４つの調査年の平均値の間に統計的な有意差は認められなかった。

運動のための環境では，「大変恵まれている」「どちらかというと恵まれている」を合わせた比率は，

1982年に20％であったものが1992年には34％に，2002年には37％，2012年には41％と比率が高まった。「恵まれているともいないとも言えない」は1982年が38％，1992年が29％，2002年が41％，2012年が37％であり，1992年で最も低率だった。「あまり恵まれていない」「全く恵まれていない」を合わせた比率は1982年が42％，1992年が23％，2002年が22％，2012年が20％であり，1982年で最も比率が高かった。４つの調査年で「あまり恵まれていない」または「全く恵まれていない」と答えた学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかを X^2 検定を用いて調べた結果，1982年－1992年，1982年－2002年，1982年－2012年でその割合に統計的な有意差があることがわかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，大変恵まれている：５，どちらかというと恵まれている：４，恵まれているともいないとも言えない：３，あまり恵まれていない：２，全く恵まれていない：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が2.76±0.97，1992年が3.14±1.08，2002年が3.22±0.98，2012年が3.35±1.08であり，有意差検定の結果，1982年－2012年の間で統計的な有意差が認められた。

運動に対する心身の適性では，「適性が高い」「どちらかというと適性が高い」を合わせた比率は，1982年が35％，1992年が34％，2002年が41％，2012年が51％であり，2012年で最も高かった。「適性があるともないとも言えない」は1982年が35％，1992年が44％，2002年が48％，2012年が29％であった。逆に「どちらかというと適性が低い」「適性が低い」を合わせた比率は，1982年が30％，1992年が21％，2002年が11％，2012年が21％であり，2002年で最も低率だった。４つの調査年で「どちらかというと適性が低い」または「適性が低い」と答えた学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかを X^2 検定を用いて調べた結果，1982年－2002年で統計的な有意差があることがわかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，適性が高い：５，どちらかというと適性が高い：４，適性があるともないとも言えない：３，どちらかというと適性が低い：２，適性が低い：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が3.17±1.09，1992年が3.19±0.95，2002年が3.33±0.70，2012年が3.47±1.08であり，年々スコアが上昇する傾向にあったが，検定の結果，４つの調査年の平均値の間に統計的な有意差は認められなかった。

日頃の健康状態では，「大変良好」「どちらかというと良い」を合わせた比率は，1982年が65％，1992年が63％，2002年が56％，2012年が73％であり，健康状態が良い傾向にある学生の比率が2012年で最も高かった。「良いとも悪いとも言えない」は1982年が24％，1992年が30％，2002年が33％，2012年が21％であった。「あまり良くない」「きわめて悪い」を合わせた比率は，1982年が11％，1992年が７％，2002年が11％，2012年が６％であり，2012年が最も低率であった。４つの調査年で「あまり良くない」または「きわめて悪い」と答えた学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかを X^2 検定を用いて調べた結果，いずれの調査年の間でも統計的な有意差は認められなかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，大変良好：５，どちらかというと良い：４，良いとも悪いとも言えない：３，あまり良くない：２，きわめて悪い：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が3.88±1.07，1992年が3.75±0.96，2002年が3.64±0.99，2012年が4.02±0.90であり，2012年で最もスコアが良かったが，有意差検定の結果，４つの調査年の間に統計的な有意差は認められなかった。

健康への関心では，「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」を合わせた比率は，1982年が39％，1992年が46％，2002年が48％，2012年が49％であり，わずかずつではあるが年々健康への関心がある学生の比率が増える傾向がみられた。「関心があるともないとも言えない」は1982年が43％，1992年が39％，2002年が43％，2012年が39％であった。「どちらかというと関心が少ない」「関心がない」を合わせた比率は，1982年が18％，1992年が15％，2002年が９％，2012年が13％であった。４つの調査年で「どちらかというと関心が少ない」または「関心がない」と答え

表13. 各調査年の学生の大学入学後の運動・健康に関する調査項目別の回答結果

調査項目		スコア	1982年		1992年		2002年		2012年		全体	
			人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
体を動かす機会	大変多い	5	15	13.2	16	13.1	6	5.7	27	16.8	64	12.7
	どちらかというと多い	4	38	33.3	28	23	22	20.8	35	21.7	123	24.5
	多いとも少ないとも言えない	3	30	26.3	54	44.3	36	34	60	37.3	180	35.8
	どちらかというと少ない	2	27	23.7	19	15.6	37	34.9	37	23	120	23.9
	きわめて少ない	1	4	3.5	5	4.1	5	4.7	2	1.2	16	3.2
	スコアの平均		3.29 ± 1.08		3.25 ± 1.01		2.88 ± 0.96		3.3 ± 1.04		3.2 ± 1.02	
運動に対する関心	大変関心がある	5	29	25.4	37	30.3	27	25.5	52	32.3	145	28.8
	どちらかというと関心がある	4	39	34.2	41	33.6	37	34.9	48	29.8	165	32.8
	関心があるともないとも言えない	3	36	31.6	35	28.7	29	27.4	36	22.4	136	27
	どちらかというと関心が少ない	2	6	5.3	7	5.7	12	11.3	20	12.4	45	8.9
	関心がない	1	4	3.5	2	1.6	1	0.9	5	3.1	12	2.4
	スコアの平均		3.72 ± 1.02		3.85 ± 0.98		3.72 ± 0.93		3.76 ± 1.13		3.76 ± 1.03	
運動のための環境	大変恵まれている	5	6	5.3	16	13.1	12	11.3	30	18.6	64	12.7
	どちらかというと恵まれている	4	17	14.9	25	20.5	27	25.5	36	22.4	105	20.9
	どちらとも言えない	3	43	37.7	48	29.3	43	40.6	60	37.3	194	38.6
	あまり恵まれていない	2	40	35.1	26	21.3	20	18.9	30	18.6	116	23.1
	全く恵まれていない	1	8	7	7	1.6	4	3.8	5	3.1	24	4.8
	スコアの平均		2.76 ± 0.97		3.14 ± 1.08		3.22 ± 0.98		3.35 ± 1.08		3.14 ± 1.04	
運動に対する心身の適性	適性が高い	5	17	14.9	11	9	4	3.8	31	19.3	63	12.5
	どちらかというと高い	4	23	20.2	31	25.4	39	36.8	51	31.7	144	28.6
	高いとも低いとも言えない	3	40	35.1	54	44.3	51	48.1	46	28.6	191	38
	どちらかというと低い	2	30	26.3	22	18	12	11.3	29	18	93	18.5
	適性が低い	1	4	3.5	4	3.3	0	0	4	2.5	12	2.4
	スコアの平均		3.17 ± 1.09		3.19 ± 0.95		3.33 ± 0.7		3.47 ± 1.08		3.3 ± 0.97	
日頃の健康状態	大変良い	5	40	35.1	28	23	23	21.6	57	35.4	148	29.4
	どちらかというと良い	4	34	29.8	49	40.2	36	34	60	37.3	179	35.6
	良いとも悪いとも言えない	3	27	23.7	36	29.5	35	33	34	21.1	132	26.2
	あまり良くない	2	11	9.6	5	4.1	10	9.4	10	6.2	36	7.2
	きわめて悪い	1	2	1.8	4	3.3	2	1.9	0	0	8	1.6
	スコアの平均		3.88 ± 1.07		3.75 ± 0.96		3.64 ± 0.99		4.02 ± 0.9		3.84 ± 0.97	
健康への関心	大変関心がある	5	11	9.6	13	10.7	12	11.3	24	14.9	60	11.9
	どちらかというと関心がある	4	33	28.9	43	35.2	39	36.8	55	34.2	170	33.8
	関心があるともないとも言えない	3	49	43	48	39.3	45	42.5	62	38.5	204	40.6
	どちらかというと関心が少ない	2	17	14.9	16	13.1	10	9.4	17	10.6	60	11.9
	関心がない	1	4	3.5	2	1.6	0	0	3	1.9	9	1.8
	スコアの平均		3.26 ± 0.95		3.4 ± 0.91		3.5 ± 0.82		3.5 ± 0.93		3.42 ± 0.91	
回答者数			114	100	122	100	106	100	161	100	503	100

表14. 運動と健康に関する各調査項目の平均スコアの年度間の有意差 (数字は T 値)

調査年	体を動かす機会	運動への関心	運動の環境	運動への適性	健康状態	健康への関心
1982年－1992年	1	1.016	2.946	0.164	1.074	1.239
1982年－2002年	3.106	0	3.459	1.26	1.905	2.051
1982年－2012年	0.083	0.331	4.876**	2.609	1.228	2.264
1992年－2002年	2.846	0.992	0.611	1.12	0.887	0.87
1992年－2012年	0.424	0.763	1.765	2.276	2.411	0.962
2002年－2012年	3.415	0.325	1.048	1.197	3.276	0

**P ＜0.01

表15. 運動と健康に関する各調査項目のスコア 1 - 2 と 3 - 5 の学生の割合の年度間の有意差（数字は X^2 値）

調査年	体を動かす機会	運動への関心	運動の環境	運動への適性	健康状態	健康への関心
1982年－1992年	1.363	0.272	8.228***	2.132	0.977	0.327
1982年－2002年	3.793	7.292***	8.228***	11.075***	0	3.468
1982年－2012年	0.237	6.452**	9.191***	2.132	1.607	0.954
1992年－2002年	9.524***	10.039***	0	3.72	0.977	1.705
1992年－2012年	0.466	9.074***	0.029	0	0.082	0.166
2002年－2012年	5.882**	0.029	0.029	3.72	1.607	0.817

***P ＜0.01　**P ＜0.02　*P ＜0.05

た学生数の割合とそれ以外の学生の割合に違いがみられるかどうかを X^2 検定を用いて調べた結果，いずれの調査年の間でもその比率に統計的な有意差は認められなかった。またスコアを用いて４つの調査年を比較するために，大変関心がある：５，どちらかというと関心がある：４，関心があるともないとも言えない：３，どちらかというと関心が少ない：２，関心がない：１というように数字に置き換え，各調査年の学生の平均値と標準偏差を算出して比較すると，1982年が3.26±0.96，1992年が3.40±0.91，2002年が3.50±0.82，2012年が3.50±0.93であり，有意差検定の結果，４つの調査年の平均値の間に統計的な有意差は認められなかった。（表13～15を参照）

４．まとめ

1982年，1992年，2002年，2012年に短期大学に入学してきた学生を対象として実施した，中学・高校時代の運動部活動の経験，大学入学後の運動への関心や運動実践，健康への関心や健康状態などについての調査結果の分析を通して，次のようなことが明らかになった。

１）中学・高校とも運動部活動経験のある者の比率は，この30年間に増加する傾向がみられたが，スポーツ基本法の制定や，学校での運動部活動の奨励，サッカーや野球など球技系種目を中心としたわが国のスポーツ熱の高まりなどが影響していることが考えられた。

２）中学・高校時代に運動部活動の経験ある者の取り組んだ種目は，中学，高校のいずれも球技系種目の経験者が多かったが，調査年によって上位種目の順位に変動があり，また中学と高校でも上位種目に違いがみられた。また，中学・高校と継続する者の多い種目と継続する者が少ない種目があることがわかった。

３）中学・高校時代に取り組んだ運動種目の競技成績をみると，中学・高校とも「特になし」という回答が最も多く，中学では「県大会出場」と「県内地区大会出場」が比較的多く，高校では「県大会出場」が比較的多かつた。また，この30年の間に大会出場経験をもつ者の比率が上昇する傾向がみられた。

４）４つの調査年で学生が最も関心を持っている運動種目は，1982年が「テニス」，1992年が「野球」，

2002年が「バレーボール」，2012年が「サッカー」であり，この30年間に関心の高い運動種目が大きく変化していることが分かった。

５） ４つの調査年で学生が最も取り組んでみたいと思っている運動種目の第１位は，1982年が「バトミントン」，1992年が「テニス」，2002年と2012年が共に「バレーボール」であり，２位以下の運動種目もこの30年の間にかなり変化していることが分かった。また，学生が関心を持っている運動種目と，実際に取り組んでみたい運動種目はかなり異なっていることがわかった。

６） 体を動かす機会が「大変多い」「どちらかというと多い」と回答した学生の比率は，1982年に47% であったものが，1992年には36% に，2002年には26% にまで低下した。しかし2012年には48% と1982年のレベルに回復した。

７） 運動に対して「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」と回答した学生の比率は，1982年が60％，1992年が64％，2002年が60％，2012年が62% と，いずれの調査年も６割台であった。

８）運動のための環境に「大変恵まれている」「どちらかというと恵まれている」と回答した学生の比率は，1982年に20％であったものが1992年には34％に，2002年には37％，2012年には41％と，年々上昇していた。

９）運動に対する心身の適性では，「適性が高い」「どちらかというと適性が高い」を合わせた比率は，1982年が35％，1992年が34％，2002年が41％，2012年が51% であり， この30年の間に適性の高い学生が増える傾向がみられた。

10） 日頃の健康状態が「大変良好」「どちらかというと良い」と回答した学生の比率は，1982年が65％，1992年が63％，2002年が56％，2012年が73% であり， 健康状態が良い傾向にある学生の比率が2012年で最も高くなった。

11） 健康への関心では，「大変関心がある」「どちらかというと関心がある」を合わせた比率は，1982年が39％，1992年が46％，2002年が48％，2012年が49% であり，わずかずつではあるが年々健康への関心がある学生の比率が増える傾向がみられた。

＜注＞

１）澤田孝二：学生の健康生活に関する研究―1982～1997年の健康生活調査結果の分析―，山梨学院短期大学第19巻，16－24.（1998）

２）澤田孝二：保育科学生の生活と健康に関する調査報告，保母養成研究第10号，93－101.（1992）

３）澤田孝二：学生の健康生活に関する研究（第３報）―20年間（1982～2002年）の健康生活調査結果の分析―，山梨学院短期大学研究紀要第23巻，（2002）

４）澤田孝二，澤田由美：短期大学学生の心身の健康と生活行動・習慣の関わりの分析（第１報）山梨学院短期大学研究紀要第28巻，90－97.（2008）

５）澤田由美，澤田孝二：短期大学学生の心身の健康と生活行動・習慣の関わりの分析（第２報）山梨学院短期大学研究紀要第28巻，99－108.（2008）

６）澤田孝二，澤田由美：短期大学学生の健康生活の変遷―四半世紀（1982年～2007年）にわたる調査結果の分析（第１報）―，山梨学院短期大学研究紀要第29巻，107－121.（2009）

７）澤田孝二，澤田由美：短期大学学生の健康生活の変遷―四半世紀（1982年～2007年）にわたる調査結果の分析（第２報）―，山梨学院短期大学研究紀要第30巻，56－64.（2010）

８）澤田孝二：学生の健康生活に関する研究（第２報）―学生の運動習慣に着目して―，山梨学院短期大学研究紀要第22巻，17－25.（2001）

９）澤田孝二：20年前・10年前・現在の大学生の運動経験および健康意識の比較，山梨学院短期大学研究紀要第25巻，59－70.（2004）

10）澤田孝二，澤田由美：短期大学学生の運動実践に影響する要因の分析，山梨学院短期大学研究紀要第32巻，67－78.（2012）

11）澤田孝二，澤田由美：中学・高校時代の運動実践が後の健康生活に及ぼす影響，山梨学院短期大学研究紀要第33巻，82－96.（2013）

12）澤田孝二，澤田由美：短期大学学生の性格特性がスポーツ行動および心身の健康に及ぼす影響，山梨学院短期大学研究紀要第34巻，63－73.（2014）

13）園部　豊，続木智彦，西條修光：大学入学時における過去の運動・スポーツ経験が首尾一貫感覚および健康度に及ぼす影響，学校保健研究第53巻，527－532.（2012）

14）大畑智弘，上地　勝，市村國夫，秋坂真史：女子短大生の骨強度と運動習慣の関連，学校保健研究第47巻，535－542.（2006）
15）金　美珍，小林正子，鎌田尚子，鈴木和弘，岡川　暁，國土奨平，松本健治：運動・スポーツの継続要因の検討，第60回日本学校保健学会講演集，147.（2013）
16）宮脇千恵美，間瀬知紀，小原久未子，甲田勝康，藤田裕規，加藤佳子，辻本悟史，川畑徹朗，石川哲也，中村晴信：大学生における運動習慣背景要因，第59回日本学校保健学会講演集，343.（2012）
17）宮脇千恵美，間瀬知紀，甲田勝康，小原久未子，川畑徹朗，辻本悟史，加藤佳子，石川哲也，中村晴信，桑原恵介：女子大学生の運動習慣とその背景要因，第58回日本学校保健学会講演集，440.（2011）
18）伊波由美子，高倉　実，上地　勝，小林　稔，宮地直也，新垣早和子，辻本しおり，金城さくら：大学生の運動行動変容ステージと心理的・環境的要因との関連，第55回日本学校保健学会講演集，282.（2008）
19）棟方百熊，西岡かおり，金田千明：女子大学生の体力と身体活動の関連について，第54回日本学校保健学会講演集，334.（2007）
20）小野三嗣：健康生活と運動，学校保健研究第22巻，260－263.（1980）
21）辻　忠：大学生男女の生活時間構造とスポーツ活動について，学校保健研究第27巻，243－250.（1985）
22）水間恵美子，青山君子，瀬戸　進，日比野朔郎：女子運動部員の体格，体力，運動能力における縦断的研究，学校保健研究第35巻，145－158.（1993）
23）松井三雄，水野忠文，江橋慎四郎：体育測定法，体育の科学社，300－324.（1975）
24）福富和夫，中村好一，永井正規，柳川　洋：ヘルスサイエンスのための基本統計学，南山堂，73－84.（1989）
25）永田　靖，吉田道弘：統計的多重比較法の基礎，サイエンティスト社，147.（1997）
26）澤田孝二：体育理論講義資料，山梨学院短期大学，26.（2014）
27）宇土正彦，畠山倫子：女性の健康と運動，現代教育社，165－183.（1994）
28）宇土正彦，正木健雄：青年の健康と運動，現代教育社，175－193.（1995）

＜参考文献＞

・澤田孝二：学生の健康生活の変遷―30年間（1982～2012年）にわたる調査結果の分析―，第56回日本学校保健学会講演集，147.（2013）
・澤田孝二：学生の健康生活の変遷―四半世紀（1982～2007年）にわたる調査結果の分析―，第56回日本学校保健学会講演集，199.（2009）
・澤田孝二：学生の健康生活に関する研究―20年間（1982～2002年）の健康生活調査結果の分析―，第49回日本学校保健学会講演集，182－183.（2002）
・澤田孝二：学生の健康生活に関する研究―1982～1997年の健康生活調査結果の分析―，第45回日本学校保健学会講演集，524－525.（1998）
・澤田孝二：大学生の心身の健康と生活行動・習慣の関わりの分析，第53回日本学校保健学会講演集，206－207.（2006）
・澤田孝二：学生の運動実践に影響する要因の分析，第58回日本学校保健学会講演集，272.（2011）
・澤田孝二，澤田由美：幼児期の運動遊びの経験が後の運動実践に及ぼす影響，第61回日本小児保健協会学術集会講演集，95.（2014）
・澤田孝二，澤田由美：中学・高校時代の運動部活動の有無と後の運動実践の関わりの分析，第60回日本小児保健協会学術集会講演集，217.（2013）
・澤田孝二，澤田由美：中学・高校時代の運動実践が後の健康生活に及ぼす影響，第59回日本小児保健協会学術集会講演集，123.（2012）
・澤田孝二：健康と運動の科学，健康教育研究会，1－32.（2001）
・澤田孝二：体育理論ガイド，健康教育研究会，1－30.（1995）
・澤田孝二：体力測定と健康チェック，健康教育研究会，1－31.（1999）
・澤田孝二：保健心理質問紙事例集，健康教育研究会，1－50.（1996）
・澤田孝二：健康・心理診断テスト，健康教育研究会，1－59.（2001）
・日本体育協会スポーツ科学委員会：体力テストガイドブック，ぎょうせい，24－38.（1982）